

現代日本の若者のアイデンティティ再考

——キャラ的コミュニケーションからみる自己概念のダイナミズム——

専攻：教科・領域教育学

コース：社会系コース

学籍：M09146G

名前：後藤 順子

I. 研究の目的

本研究は、キャラおよびキャラを用いた若者のコミュニケーションに注目し、後期近代の日本における若者のアイデンティティを再考するものである。

第一に、近年、若者を中心に認知されているキャラ概念の生起を、日本のキャラクター文化の発展の中にとらえ、現代にいたるまでの日本のキャラクター文化の広がり、キャラ概念の特徴を整理する。

第二に、先行するキャラ研究の捉え直しをふまえ、土井隆義の主張に依拠しながら、若者が相互行為の場で用いる外的なキャラと、個人の心理的核心として意識される内的なキャラの相互関係を明らかにする。

第三に、本研究では、キャラをアイデンティティの諸相のひとつと捉え、E.ゴフマン及びA.ギデンズのアイデンティティ概念と比較・検討を行う。その過程で、現代日本の若者のアイデンティティの特徴を整理する。

II. 論文構成

はじめに

第一章 キャラと若者の関連

第1節 個性としてのキャラ

——バラエティ番組の変遷を手がかりにして

第2節 サブカルチャーのキャラクターとキャラの関連

第3節 キャラ先行研究概略

——若者へのネガティブイメージとその射程

第二章 キャラクター文化の発展とキャラの派生

第1節 明治・大正期のキャラクターと子ども向けキャラクター文化の誕生

第2節 玩具とキャラクターの普及

第3節 キャラクター受容という視点からの70年代再考

第4節 キャラクター表現の広がり

第5節 キャラクター受容の質的転換と「キャラ」概念の登場

第三章 キャラのコミュニケーションからみる若者のキャラの実態

第1節 キャラクター(性格・人格)と若者のキャラの比較

第2節 キャラのコミュニケーションからみる若者のキャラの特徴

第3節 キャラのコミュニケーションが引き起こす葛藤

第4節 相互行為における「内キャラ」と「外キャラ」の関係

第四章 若者のキャラ論におけるアイデンティティと社会学理論におけるアイデンティティの比較

第1節 キャラのコミュニケーションにみるアイデンティティ

——「内キャラ」と「外キャラ」

第2節 個人的アイデンティティと社会的アイデンティティ

第3節 自己アイデンティティ

第4節 若者のアイデンティティの特徴

むすびにかえて

III. 論文の概要

第一章では、若者論を含む、キャラに関する先行研究を概観する。

そして、既存のキャラ論が若者の相互行為や他者認識、集団形成などに焦点をさだめた議論であり、そこには若者に対するネガティブイメージが、暗黙的かつ前提的にうかがわれることをふまえ、既存のキャラ論の問題点と、研究目的との関連を明らかにする。

第二章では、キャラという語の射程に目を向け、明治以降のキャラクター文化の歴史をたどりながら、キャラクターとキャラの分岐について整理する。

また、キャラクター文化から派生したキャラが、キャラクターとオーバーラップしながら受容され、かつ

キャラクターとは異なる発展を遂げた現状を報告する。さらに、第二章全体を通じて、商品経済の一部であったキャラクターが、キャラとして人間関係に置き換えられていった過程を示している。

第三章では、文化的な背景を持つキャラ概念を念頭に置きつつ、従来の性格や人格の概念と、キャラの指し示す実態の差を明らかにする。特に、土井隆義の主張に依拠しつつ、若者の外的なキャラと内的なキャラを区別し、それぞれの特徴と相互関係を整理する。

第四章では、他者との相互行為を前提として成り立つ自己概念としてキャラを再定義し、E.ゴフマンとA.ギデンズのアイデンティティ概念との比較・検討を行う。

特に、若者が社会的アイデンティティと個人的アイデンティティをどのように認識し、管理しているのかについて考察する。また、後期近代の日本において行われる、自己の再帰的プロジェクトの中で、キャラが呈する自己概念を検討する。

そして、キャラによる若者の自己概念が呈する課題と展望を、本研究の考察をもとにまとめていく。

IV. 研究の成果と課題

1. 研究の成果

第一に、キャラクター文化とキャラ概念の興隆の関連を考察し、今日若者を中心に認知されているキャラ概念を下支えする存在として、キャラクター文化の発展を再定義した。

第二に、キャラ概念の萌芽を、70年代の二次創作の表現に指摘し、伊藤剛の主張に依拠しつつ、キャラとは物語のテキストからキャラクターが遊離することにより発生した概念であることを確認した。

また、物語とキャラクターの分断を違和感なく受容する受け手の感性は、1980年代にはすでに一般的となっていたことを指摘した。

第三に、土井隆義に従い、若者のキャラを「外キャラ」と「内キャラ」に区分し、個人のキャラ間の相互関係を考察することで、二つのキャラは分断の関係ではなく、相互行為を通じて緊密な結びつきを形成していることを指摘した。ここからは、若者の自己概念には身近な他者の反応が重要な要素となっていることが

把握できた。

第四に、若者のキャラをアイデンティティとして考察することで、若者が仲間集団の他者との関係において、個人的アイデンティティを外キャラとして管理していることが指摘できた。さらに、内キャラは、ギデンズの指摘した自己アイデンティティと同じく、個人の生活史の範囲で再帰的に構築される自己像であると同時に、塑性を欠いた自己像であることを再確認した。

2. 今後の課題

本研究において明らかにした若者のキャラは、現代日本の若者の特徴的な自己概念として捉える事ができた。しかし、後期近代の日本に生きる若者の、自己概念のすべてを看破する概念であるとは言い難い。現代日本において人生は、自己決定と自己責任を強調する社会の制度的仕組みの中に再埋め込み化されている。若者のキャラは、そうした人生において、再帰的に構築される自己が見せる、暫定的な諸相のひとつである可能性が高い。

また、キャラ先行研究においては、キャラをアイデンティティと比較し、キャラの新奇性を見出そうとする考察も多かった。しかしそうした先行研究の考察には、現代の若者の移行に関する時間軸が説明されていないなど、「社会制度」に関する考察が不十分であった。よって、社会化という視点から、若者のキャラはアイデンティティとして再考されるべきといえる。

さらに、キャラ的コミュニケーションには個人を排除するメカニズムが確認できる一方で、人種や国籍、ジェンダーなど、いわゆる人間類型や「外見」を超えた連帯を作り出す可能性が指摘できる。現代日本の若者がキャラによって生み出す連帯の実態を整理するとともに、そのような連帯の存立基盤となる「社会制度」について、社会学の知見を整理し考察する必要がある。

主任指導教員 首藤 明和
指導教員 首藤 明和